アイドルマスター×まよチキ

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アイドルマスター×まよチキ

【Ｎコード】
Ｎ２４６２ＢＡ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
神が寝ぼけていた所為で死んでしまった俺は、その後訳の分からん空間におりそこでポケモン談義に花を咲かせ、その後色々頼み、アイマスとまよチキの二つの世界を併せて貰いそこへ転生することに……。まあ、楽しみましょうや。※不定期更新

ポケモン談義（前書き）

思いつきで始めました。

ポケモン談義

唐突ですが、俺こと新山響（にいやまきょう）は、ほんの数分前に信号無視の軽に轢かれて死んだのだが、目を覚ますと何故か肉体もあり意識もハッキリしていた。しかも、傷まで無くなっていた。んでもって目の前には……なんか……こう女将（かみ）さん的な

「かみ違いでしょ、それは」

おっと聞こえていたいたようで。

「ていうか、聞こえてるならさっさと入って来いよ。延々モノローグかと思っただろ、こんボケ」

「私が悪いの？」

「知らん」

女将さんが溜息をついた。

「まあ、あまり動揺とかしてないみたいだし、本題に入るよ？」

「ウィ」

「死んだのは分かってる？」

「ウィ」

「ごめん。それ、私の所為」

「ウ……はい！？」

あまりにも軽く言われて危うく流す所だったぞ。

あ、ちなみに俺は生粋の日本人なんで、髪も目も黒だべよ。後高校生。

「いやね？　ホントはあの車が信号を無視することも、もちろんあんたが死ぬことも無かったんだけど……昨日遅くまでゲームしてて、寝ぼけてたみたいでさ……いや、ホントごめんね？」

この女将さんは正反対の真っ白な髪しててて、目は蒼。身長は百六十くらいかな？　あ、俺は百七十。

「女将さんもゲームとかするんだな？」
「あ、聞く所そこなんだ？　まあ、いいや。ほら、昔やってたゲームをやり出すと止まらないことってない？」
「あ、あるある。なんか夢中になるよな？」
「でしょ？　で、ポケモンのサファイアを発見してね？　やってみたら面白くってさぁ……あんたは最初のポケモン何にした？　私はミズゴロウ」
「俺はキモリだったな……でも、アスナの所は苦労した」
「あ～……炎タイプだもんね。砂漠で地面タイプ捕まえてもそこから育てるのって面倒だし」
「そうなんだよなぁ……まあ、最初のジムはかなり簡単に済むんだけど」
「そこはミズゴロウも同じよね？　なんてったって水タイプだし。でね？　思うんだけど、岩タイプって弱点多すぎない？」
「それはホントに思うよ。鋼・水・草・地面・格闘の五つもあるんだからな……そう考えるとあれでジムリーダーになるって凄いよな？」
「そうよね……あ、後さ、あの四体は共通して格闘が弱点よね？」
「レジ兄弟だろ？　なんでだろうな？　考えるのが面倒だったのかな？」
「どうなんだろう……あ、他にもやったことあるポケモンシリーズって何がある？」

「えっとな……金・銀・クリスタル・ルビー・サファイア・エメラルド・ダイヤモンド・パール・プラチナ・ブラック……この辺りだな」
「結構やってるのね？」
「ああ。それでさ、プラチナって、ディアルガとパルキアの両方が出るだろ？」
「ええ。捕まえるの結構大変だったわ」
「俺もパルキアは苦労したんだけどさ、ディアルガはモンスターボール一発でゲット出来た」
「うそ！？」

俺の言葉に異様な反応を示し、女将さんは詰め寄って来た。て……近くで見ると可愛いな。顔のパーツはどれも整ってるし、なんか良い匂いもする。

「ねえ、それ本当なの！？」
「あ？　あ、ああ。ガブリアスの地震でな、半分位減って、投げてみたらゲット出来た。いやあ、ビックリしたよ。思わず二度見しちまった」

思考を振り払って答えれば、女将さんは興奮した様子で俺の手を握ってきた。そこまでか？

「それで？　とりあえずポケモン談義は置いてといてさ」
「あ、そうだった……これからのことなんだけど、貴方はどうしたい？」
「と、言うと？」

女将さんは俺から少し離れて座った。

「私の所為で、貴方は死んだから……元の生活に戻すことは出来ないんだけど、別の世界に送ることなら出来るの。それから、お詫びとして何かお願いがあるなら、可能な限り叶えることも出来るんだけど」
「なるほど……じゃあ、とりあえず一つ目の願いとして、俺を轢いた車の運転手が俺を轢いてないことにしてくれ。近くで遊んでた子どものボールに突撃したとか、そんなんでいいからさ」

俺はもう死んでる訳で戻すことも出来ないなら、結果を変えても俺がここにいることは変わらないだろうしな。あの近くには公園もあったから、それで問題ない筈だ。

「え？　いいけど、どうして？」
「運転手だって、あんたが寝ぼけてた所為で俺を轢いちまったんだろ？　それじゃ、そいつのこの先の人生お先真っ暗じゃねえか。そんなのはご免だ」
「あ……ごめん」
「謝らなくてもいい。結果を変えてくれたらそれで」

謝る女将さんの頭を撫でると、小さく頷いた。

「それから、ついでに俺の存在を無かったことにしてくれ。そうしないと不自然になるからな」
「え！　そんな、どうして！？」

急に頭を上げたことで、俺の手が離れた。

「結果を変えて、俺が死んでないことになった。でも、俺はここにいる。それなら、死ぬ前の俺はどこに行ったんだって、なるだろ？　そうすると親父とお袋、特に妹が心配しちまうし。家族を心配さ

せたくないからな」
「でも、友達とかの記憶からも消えるよ？」
「構わないって……ていうか友達いねえし……それで？　出来るか？」
「もちろん……できるけど」
「じゃ、まずはそれを頼む」
「……」

女将さんは暫く黙り込んだが、やがて無言で頷き立ち上がった。そして目を閉じると、何かを呟き始めそれもすぐに終り、目を開いた。

「……終わったよ？」
「おう。サンキュ……て、どうした？」

女将さんは、何か沈痛な面持ちをしていた。

「本当に良かったの？」
「ああ。で、次なんだけど、さっき別の世界に送ることは出来るって言ったよな？」
「うん」
「それってさ、別々の世界を一つにすることも出来るのか？」
「え……あ、世界観が近いなら、出来ないことはないけど」
「じゃあさ、『アイマス』と『まよチキ』。この二つを併せることってできるか？　世界観も近いだろ？」
「うん。それなら出来る。でも、どうしてその二つ？」
「いや、どっちの世界にも行ってみたいな～、って思っててさ」

あの二つがもし同じ世界で起こってたらどうなってるのか、って考えると結構面白い気がするし。

「そうなんだ……うん、それは、貴方を送るのと同時にやっておくわ。家族はどうする？」
「いい。捨てられたってことにしてくれ。死ぬってのは、いくらなんでも嫌だしな」
「そんな……そこからどうするの？」
「あんたの力なら、なんとか出来るだろ？　まあ、細かいことは任せる」
「……分かった。他には？」
「『如月優』の死が起きない様にしてくれ。あ、でも、765プロに所属するのは変えないで。これくらいで頼む」
「分かった。それじゃ、早速送るね？」
「ああ。楽しかったよ」
「私も楽しかった」

まさか、死んだ後にあんなにポケモンの話しに花が咲くとは思ってなかったしな……女将さんも喜んでくれたみたいで何よりだ。

「お？　なんか、急に眠気が……」
「大丈夫。目を覚ましたら、貴方の希望通りの世界にいるから」
「そ……か……」

駄目だ。強すぎて何も言えん。

「バイバイ、響。またね？」

意識を失う寸前に見えたのは、笑いながらそう言って手を振る女将さんだった。

幼馴染みは金髪三つ編み

「……う……きょ……」

誰かに名前を呼ばれ、俺の意識は少しずつ覚醒していき、もう少しで目を覚ますと言った所で、

「響！　起きなさい！」

思っくそビンタされた。

「あのさ……起こす時にビンタするのいい加減止めてくんない？　毎朝教室入った途端笑われるんだからな？　特にあの黒髪ツインに」

「だって、起きないでしょ？」

「まさに起きようとしていた所でいつもビンタが飛んでくるんですけどね！」

「じゃあ、明日はもう少し優しく起こしてみる」

「そうしてくれると助かる」

やあ、皆さんこんにちは、或いは今晩は、また或いはおはよう。ご存じ新山響です。

女将さんのいる所からこの、アイマスとまよチキの世界に送られ

た後、目を覚ますと赤ん坊で頼んだ通り捨てられた設定になっていたが、そこも頼んだ通り生きていける様にしてくれた。そんで、その後暫くして、めっちゃ小さくなった女将さんが来たんだよ……いや、ビックリしたね。いきなり近づいて来ていきなり俺を連れて行ったからな……誘拐にしか見えないぞ。

『心配だから、響が死ぬまで一緒にこっちで生活する』

と言って聞かず、その日から女将さんと俺は家族となった。連れてこられたのは、浪嵐学園の近くにある家で、当然高校はそこに行くことになった。話が前後するが、それまでの十数年間でアイマスメンバーとも全員知り合った。

「新山雪（にいやまゆき）」

「いきなりなんだ？」

「え？　自己紹介。ちなみに神の時の名前は『ミーシャ』」

「まあ、知ってるけどな」

「見てる人は知らないでしょ？」

「あ、なるほど」

ちなみに俺も雪も容姿は全く変わってない。

さて、では次に、

「あ、響くん、雪ちゃん。おはよう。相変わらず綺麗な紅葉だね？」

「だろう？　そしておはよう、歌織」

「おはよう。響の『そして』の意味が分からないけど」

幼馴染みを紹介しようと思う。

今、俺たちに声を掛けてきた女の子は、まよチキのアニメ十三話で同人誌販売の会場にいたりゲームショップっぽい所から大量の買い物をして出てきた金髪お下げを三つ編みにしている奴だ。よく分からんと言う人はアニメを見ておくんなまし。で、名前は緋耶麻歌織(ひやまかおり)。俺たちのお隣さんで、幼少の頃から一緒に遊んだり、ポケモンやったり遊びまくったりして、高校生になった今もそうやって遊んでいる良き友だ。アニメでは、浪嵐じゃなかったが、この世界では浪嵐に入っている。クラスも俺たち三人は一緒……というか、幼稚園の時からずっと一緒だった。

「所で歌織よ」
「なんだね、響くん？」
「宿題はやりやがりましたか？」
「やりやが……ってる訳ないでしょ！」
「だよなあ！　あはははは！」
「そうだよお！　分かってる癖にい！」

互いに笑い合いながら少しずつ向きを雪に変えていき、

「「写させてください！」」

腰を九十度に曲げて頭を下げた。

「せい！」
「いって！」
「あう」

だが、拳骨を喰らった。

まあ、威力は明らかに俺の方が強かったが……。

「昨日ね、ホワイトをやっててて、キュレムを捕まえに行ったんだけど、途中でメタングが出てきたのね？　それで……」

学園に到着し、教室に入ると案の定黒髪ツインに笑われ、執事は笑ってはいなかったが肩が震えていた。席に着き、まあいつもの様に周りには雪・歌織・黒髪ツイン（もう分かってると思うから今後は涼月と言うことにする）・執事（以下略で近衛と以下略）・坂町兄・黒須が集まった。その中で何故か俺の膝の上に陣取った歌織が昨日のポケモンの話を始め、そこで一旦言葉を切った。

「それで……どうなったんだ？」

近衛が早く続きを言えと言わんばかりに身を乗り出して聞いた。

「――――そいつにモンスターボール全部使っちゃったあああ！　響く～ん！　もうあいつ嫌い！」

「おお、よしよ～し。よく頑張ったな」

そして膝の上にも関わらず器用に俺に抱きついてきた。頭を撫でながら慰めていると、どうしてだろう？　周りの気温が少し下がっているような気がするのは。まあ、いいか。

「う……うう……響くん、暖かい」

「そうか？」

「「……」」

少し泣きやんだ歌織がこのままだと眠りそうな声色でそう言い、涼月と近衛は何か笑みとオーラを放ちながら、坂町兄と黒須は怒った顔で見ていた。雪は泣いている歌織の頭をそっと撫でている。ふと視線を感じ、教室の中を見回してみると、男子生徒の殆どがどす黒いオーラを浮かべて俺たちの方を見ていたが、まあ、気にしない。これもいつものこと。その後、数分が経過した所で始業を告げる鐘が鳴り担任が入ってきた。

「おらそこ、イチャついてないで席に着け……って、なんだお前らか。じゃあ、いいや。今日は始業式が終わったら解散だからな～、さっさと体育館に行け。以上」

そう言って担任は、席に着けと言ったにも関わらず殆どの生徒が席に着いていない状態で適当に説明し退散していった。

「なあ、涼月よ」
「何かしら、響くん？」
「お前の親父さんはなんであいつを雇ったんだ？」
『……』

その問いに答えられる者はいなかった。

「（略）。良い学園生活を送るように」

正しくあっという間に始業式は終わり、学生はみんな解散となった。涼月と近衛は車で帰り、坂町は真っ直ぐ帰った。黒須はどっか寄っていくみたいだ。

「おう、どした？」
『やっほー！　響兄ちゃん！　今暇？』
「ああ、暇と言えば暇……でもないみたいだ」
『あれ？　そうなの？』

電話の相手は７６５プロ所属アイドルの一人、双海真美。暇かどうか聞いてきて、暇だと答えようとした所、歌織に睨まれそういえばゲームする約束をしていたな、と思い出し撤回することになった。

「それで？　どうしたんだ？」
『あ、そうそう。最近、響兄ちゃん来てないでしょ？　それでみんな暇になっててさ……少しでも来れない？』
「あ～……そういえば、春休み初日しか行ってなかったな。雪達も一緒で問題ないなら、多分大丈夫だぞ？　いいか？」

聞くと二人は頷いたので、それを伝えると真美は二つ返事で了承した。適当な服に着替えて、ＤＳとＰＳＰを携帯し三人で仲良く７６５プロへ向かった。ＤＳにはポケモンのブラック、ＰＳＰにはセブンスドラゴン２０２０を入れて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2462ba/

アイドルマスター×まよチキ

2012年1月6日19時45分発行